**「佐渡の時期の世阿弥とその周辺」**

目次

一、佐渡の能と世阿弥配流について　　　　　　　　　　　　　 　　　　　　　　1～3頁

二、松岡心平氏の「世阿弥と満済」について　　　　　　　　　　　　　　　　　　4～5頁

三、越前猿楽(若狭猿楽)と世阿弥との接点について　　　　　　　　　　　　　　　　6頁

四、世阿弥の晩年から越前猿楽座の展開について 　　　　　　　　　　　　　　 7～8頁

(まとめにかえて)　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 　8頁

1. **佐渡の能と世阿弥配流について**

1、佐渡の能と世阿弥配流について調べたり考えたこと

1月の研究会で世阿弥が佐渡島の多田(大田)の浦に上陸をしたところを読みました。

そこで佐渡の能に関して調べておりましたら佐渡では本間家能舞台の他、主に神社に能舞台が造られてきており、珠洲の春日神社の能舞台や大膳神社の能舞台、牛尾神社の能舞台などがあることが分りました。また「世阿弥の頃の佐渡」(PDF)を参照すると佐渡の能舞台は春日神社の神事として始められたものだったこともありその重要性が分かりました。

世阿弥はその生涯をかけて能芸を大成していきますが72歳の高齢で佐渡に流されたのは1434年(永享6年)の5月4日のことで「若州」「海路」にあったように「風光明媚な小浜に本土最後の地として立ち寄りたい」と願い出て、若狭街道の洞峠か琵琶湖の舟便で小浜の泊まで行き1泊してから、津田の入り江という港から佐渡島へ高瀬舟のような舟に乗せられて行ったのではないかと考えられます。

　なお、2月の世阿弥研究会での鎌田先生のお話を伺っていると、天皇であった順徳院はそのご身分にふさわしい舟で佐渡まで流されていたようでしたし、能楽を大成した世阿弥のことは皆もよく知っていたはずなので絵図などが残っていると分かりやすいのですが、それに相応しい格式の舟に乗せられて佐渡まで流されていったようにも思いました。

『金島書』の「海路」のとこにあった世阿弥の文書から考えると、具体例でいうと、舟での世阿弥はまさに『世阿弥能楽論集』の表紙絵にもあるような雰囲気で佐渡島に配流となったのではなかったのかとも思われました。

「海路」ではその日は波も穏やかであったことが記されています。

藤沢周著『世阿弥最後の花』河出書房新社2022にも出てきますが、舟に乗る世阿弥の傍らに今は亡き父観阿弥と嫡男の元雅の霊魂というのか思いが寄り添っていたことでしょう。

後に、小浜市では1987年(昭和62年5月)に「世阿弥船出の地の記念碑」が建てられました。「世阿弥船出の地の記念碑」は福井県小浜市の公式ホームページを参照しています。

水主(舵を持って舟を漕ぐ人)と世阿弥、それから都からのお役人が同乗していたことでしょうか。佐渡島の方での地頭職は本間家の本間六郎左衛門だったと思われます。

だから水主を含めて同乗していたのは合計3人から5人程度の人であったと思われます。

また佐渡島での世阿弥の生活面のことに関しては『世阿弥最後の花』にも描かれていたように佐渡島の人々が行っていたことでしょうし、都に縁のある神社や地名も『金島書』には出てきました。佐渡で初めて訪れる土地へと旅をしてきた世阿弥ですが、都にもゆかりのある地名の場所に訪れることによって何か縁を感じたかもしれません。

そしてこのシチュエーションは能の冒頭部分でワキの能楽師が主に旅の僧侶として登場するところにも重なります。それはシテ方であった世阿弥がまるでワキの役者になっているかのようにさえ感じられるかもしれません。

なお『世阿弥最後の花』にも出てきていたように、佐渡島の多田(大田)の浦に着いて、泊で一泊してからは本間家側のお役人とも合流したであろうことが推測されます。

田中圭一先生の「世阿弥の頃の佐渡」(PDF)や「佐渡の中世―日蓮上人配流とその周辺」(PDF)も参考にしてまいりますと、世阿弥以前に佐渡島へと流されたのは第84代天皇で承久の乱(1221年)に敗れた順徳院、鎌倉仏教日蓮宗の宗祖日蓮上人などがいますが、日蓮上人の場合には、どのような舟でどこからどこまで何日くらいかけて移動したのか明確に書かれていて、佐渡島までの「海路」のところは大変よくわかりました。

2、佐渡島での世阿弥の様子について調べたり考えたこと

世阿弥の佐渡配流に関しては、斎藤清衛「金春禅竹の運命」(PDF)を読んでいくと大変興味深いことが書いてあることに気が付きました。

すなわち世阿弥は71歳の時(永享6年)に上意軽視横暴の罪で自害を命じられていたこと

やそれが一休和尚のはたらきで佐渡配流となったとする説が紹介されていたことでした。

　また世阿弥の佐渡配流の期間は、当初には永享6年から23年とされていたところ、世阿弥が佐渡で書いた『金島書』は単なる紀行文ではなく敬神と法楽の意味があることや、後年には音阿弥が能を舞っているのを見ていた時に赤松満祐によって足利義教が暗殺されたこともあり、永享6年から2・3年で佐渡から京都へと帰れたとする説が紹介されていました。

金春流で思い出されるのは世阿弥の娘婿となった金春禅竹のことですが、その金春流は大和猿楽4座の中で最古であり秦河勝を遠祖として持つことも書かれていました。

そして、配流中に世阿弥は金春禅竹に宛てて「定家葛」「山姥」「松風」「三輪」「三井寺」

「熊野」「芭蕉」「東北」「桧垣」「井筒」など謡曲詞章を作り永享9年には「花鏡」を相伝していたことも分かり参考になりました。

「花鏡」は「一調二機三声」「動十分心・動七分身」など11項目に分かれているところ、

至るところに禅思想の趣旨が見られるとあります。

佐渡島にいた時の世阿弥の様子について書かれた資料として佐渡博物館の「世阿弥の頃の佐渡」(平成9年)の講演録や日蓮上人が配流された頃の佐渡の様子に関する「佐渡の中世－日蓮上人配流とその周辺」(平成8年)の講演録などにも目を通しておりましたが、当時の佐渡へ配流された様子などが詳しく書かれてありました。日蓮上人の場合には鎌倉から寺泊までが12日間だったことや、海路では日蓮がお経を唱えると海が静まったが冬の海で舟はかなり揺れたことなどが分かります。また、途中で舟底から水がもれることもあったそうでしたが、日蓮がお経を唱えたところその水もれが止まったこともありました。

そして佐渡上陸では松ヶ崎に着いてそこで一泊したであろうとあります。

もっとも都から佐渡へと流罪とされた人がどのような扱いを受け生活を送っていかなければいけないのかに関してはたやすいことではなかったはずですし、別の論があります。

配流中の1272年(文永9年)根本寺の塚原三昧堂での塚原問答がよく知られておりますが、佐渡では2年半ほど暮らした後に日蓮上人は赦免されて帰ることができ、その後日蓮宗を広めていかれた訳でした。佐渡には現在も日蓮上人の銅像が残されています。

首都圏佐渡連合会の「田中圭一講演集」のページにそのPDFの文章がまとめられており、それを見つけることができたことも今回の大きな発見でした。

田中先生は、両津高校・佐渡高校教諭を経て筑波大学教授を務められた先生でした。

現地の人だから分かる佐渡の歴史に関する大変興味深い講演録が残されていました。

ところで、佐渡配流となっている間の時期の世阿弥は、本来なら能楽師として佐渡島に流された人々のためや土地の人々のために能を謡い、舞わなければならなかったはずですがどうしていたのでしょうか。

この点、『世阿弥最後の花』を読んでいても世阿弥は折に触れて佐渡で能を舞っていたのだろうなという思いを強くしました。

(一、の参考文献・資料)

小西甚一編訳『世阿弥能楽論集』「金島書」たちばな出版(2004)

藤沢周著『世阿弥最後の花』河出書房新社(2022)

「世阿弥流罪考」

<http://www.uranus.dti.ne.jp/~ohta/newpage225.html>

小浜市「世阿弥船出の記念碑」

<https://www1.city.obama.fukui.jp/kanko-bunka/kanko/meshoto/85.html>

田中圭一「世阿弥の頃の佐渡」(PDF)

田中圭一「佐渡の中世－日蓮上人配流とその周辺」(PDF)

<http://sado-rengokai.org/renraku_iin/renraku_tanaka.html>

斎藤清衛「金春禅竹の運命」(PDF)

<https://www.konan-wu.ac.jp/~nichibun/kokubun/16/saito1969.pdf>

1. **松岡心平氏の「世阿弥と満済」について**
2. 観阿弥・世阿弥と満済・隆源の接点

観阿弥と世阿弥の親子は京都の醍醐寺での演能を足がかりとして世に出たことはよく知られています。これが3代将軍足利義満の時代です。

この点、松岡心平氏は「■研究十二月往来〈315〉―世阿弥生誕六五〇年企画―世阿弥と満済」の中で大変興味深いことをご指摘されておられました。

醍醐寺の僧である満済(1378～1435)は『満済准后日記』の中で醍醐寺の三宝院門跡および醍醐寺座主としてのお立場から、世阿弥の能に関する役職など重要な記録と元重(音阿弥)と義教に関する能のことなどの記録をされた、能楽史に深く関りを持つ人物です。

満済の師であり補佐役には隆源(1341～1425)がいますが、隆源は世阿弥が清滝宮の楽頭職となって能を舞ったことを知った時に、観阿弥と世阿弥の親子の醍醐寺で50年前に行われた「7日間の猿楽」のことを思い出してコメントを書きつけてあるそうです。

(『醍醐寺新要録』所引『隆源僧正日記』応永三十一年四月二十日条)

当時の世阿弥の演能の様子などを知る大変重要な文献と言えます。

1. 義持と増阿弥、勧進田楽の展開

4代将軍足利義持の時代になると義満の北山殿から義持は三条坊門殿へと移しましたが、その治世は各地で反乱がたびたび起きていた時代でもあったために、田楽能の増阿弥をひいきにして世阿弥を冷遇したとされます。

そのため田楽の近江の本座と白河の新座とが形成され発展していったことが述べられていました。増阿弥は田楽の喜阿弥(亀阿)の弟子で謡に優れており、京周辺の寺社などで大規模な勧進田楽を行っていたようでした。勧進田楽は寺や橋などの修復を行うことを目的とした資金調達のために行われていたものです。

桟敷席には将軍を始めとして大名などがおり、観阿弥も田楽の増阿弥のことを評価していたようでした。

1. 義教の勧進猿楽と音阿弥

観阿弥や世阿弥が初めて京で世に出たのも足利義満の勧進猿楽でのことであって、後に足利義教も自らが主催する勧進猿楽に音阿弥を出演させて能舞を舞わせています。

足利義教は三宝院門跡で醍醐寺座主である満済に足利義満と世阿弥の時の勧進猿楽の様子に関して質問していたそうでした。

かつて足利義満は自身が筆を振るって桟敷席の割り振りを決めていたそうで(義満自筆桟敷絵図)、足利義教はそのことを満済にたびたび質問していたことが知られているそうです。

松岡氏は、義教自身が主催する観世元重(音阿弥)にとって初めての勧進猿楽をぜひとも成功させたいという思いがあったのではと分析されておられました。

ところで、それでも満済は世阿弥に対して悪い印象は持っておらずむしろ好意的であり、世阿弥父子による仙洞御所での演能を仲介していたのに、それを義教によって阻止され、翌年には足利義教からの強い要請を受けて清滝宮楽頭職を世阿弥から観世元重(音阿弥)に替えざるをえなかったということもありました。

　松岡心平氏の「世阿弥と満済」を深く読んでみて、足利義満と世阿弥、足利義教と音阿弥の関係がよく見えてきたように思われました。

　世阿弥などの特定の役者たちを召喚して舞を舞わせて楽しむことができていた時期と、勧進田楽の際に将軍や大名らから集まった資金を橋などの修繕のために優先的に用いていくようになった時期との違いについても学ぶことができ大変興味深かったです

　足利義満の思いやはからいがあったからこそ世阿弥らも世に出て活躍し能楽の文化が今日に至るまで花開いていきました。

現在、能楽は生涯にわたりその道を究め舞うことができるものになっています。

足利義満の時代には、もてはやされた世阿弥たちの能が足利義持、足利義量、足利義教の時代にはそうではなくなっていったことの背景に着目していくと、時の将軍が目指す理想とする政治の形や財政的な要因と増阿弥など田楽能の隆盛も見て取ることができそうです。

万人恐怖の政治を行ったとされ後に自らも音阿弥の能を見ている時に暗殺される足利義教ですが、音阿弥の勧進猿楽の辺りのことを考えていくと死罪の次に重いとされる島流しに世阿弥を処したことの判断はどうだったのか考えさせられました。

世阿弥は、観阿弥や寿椿、元雅の形見などを佐渡への配流の時に何か持っていったのか。

佐渡でどんな能をどれぐらい舞っていたのか。誰か佐渡の人に能を教えていたのか。

京都や奈良へはいつ頃帰ってきて再び能を舞い、謡ったのかなど関心事は尽きません。

(二、の参考文献・資料)

『醍醐寺新要録』所引『隆源僧正日記』応永三十一年四月二十日条

『満済准后日記』

松岡心平「■研究十二月往来〈315〉―世阿弥生誕六五〇年企画―世阿弥と満済」(PDF)

<http://www.tessen.org/archive/files/2013/11/315.pdf>

「京都府/京都大学こころの未来研究センター共同企画 」

平成24年度こころを整えるフォーラム

観阿弥生誕680年世阿弥生誕650年記念―観阿弥と世阿弥の冒険―」

<http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/jp/news/H24Hagukumi03.pdf>

**三、越前猿楽(若狭猿楽)と世阿弥との接点について**

福井県の小浜市には昭和62年(1987年)に「世阿弥船出の記念碑」が建てられています。

この小浜は若き日の足利義満が生涯に4度訪れて遊んだ地として知られており、世阿弥もそのお供として若き日に訪れていたという伝承が残っている地だそうです。

若狭地方では、若狭猿楽が行われてきており相当高度に発達していたことも「福井県史」通史編2中世を読んでいくと分かりました。

後に世阿弥が生まれた頃は、観阿弥は興福寺の庇護を受けていた大和猿楽結崎座の初代能大夫でしたが、小浜など若狭地方にも有力な猿楽座が存在していたことが分かりました。

書籍では山田雄造著『若狭の翁と猿楽能』風詠社(2009)があります。

この点『福井県史』通史編2中世によりますと、『拾椎雑話』にかつて若狭地方の猿楽座は、元来は倉、尾古、吉祥、気山の4座があったとされますが、いつしか倉座を中心とし他は倉座に従うようになっていったことも記されています。

世阿弥が生まれる前の観応2年(1351年)には若狭地方において気山座が楽頭職を務めていたところ、明応4年(1495年)に倉座が楽頭職を奪ったことも分かりました。

小浜市のある若狭地方がそれほど猿楽座の栄えていた土地であるならば世阿弥はよく覚えていないと『金島書』の「若州」に書いてありましたが、若狭猿楽の能楽師と能を舞ったり小浜に能を舞いに訪れていたことはあったのでしょうか。

晩年の世阿弥が流罪とされるときに本土最後の地として小浜を選んだ理由には、若狭猿楽の倉座などとの関係はなかったのかなど気になってくるとこでした。

(三、の参考文献・資料)

『拾椎雑話』

「福井県史」通史編2中世　　「越前猿楽」「若狭猿楽」

<https://www.library-archives.pref.fukui.lg.jp/fukui/07/kenshi/T2/T2-00.htm>

<https://www.library-archives.pref.fukui.lg.jp/fukui/07/kenshi/T2/T2-6-01-03-01-01.htm>

<https://www.library-archives.pref.fukui.lg.jp/fukui/07/kenshi/T2/T2-6-01-03-01-02.htm>

1. **世阿弥の晩年から越前猿楽座の展開**

世阿弥晩年の永享7年(1435年)2月21日には「越前猿楽が新参し、御所に於いて仕る」ことが記されていました(看聞日記同日条)。

1435年というと世阿弥が佐渡へと配流された次の年のことで、この時の京都室町第で行われた猿楽は足利義教夫妻と伏見の宮の貞成親王(1372～1456)を主要な観客とした観世と越前猿楽の立合い(競演)であったようでした。

観世(結崎座)のシテ方は年盛りの音阿弥で五番の能を舞い、越前猿楽座では福来が観世に拮抗する8番の能舞を舞ったそうでした。(満済准后日記同日条)。

この越前猿楽の福来を将軍足利義教の前にデビューさせた人物は室町時代中期の守護大名の斯波義郷(1410～1436)でした。彼は初め僧侶でしたが足利義教の命により還俗して家督を継いだ人物でした。斯波義郷は短命であったようですが、青蓮院座主で仏道の道を歩んでいた足利義教(僧侶時代の名は義圓)ともよく似た境遇の人物であり、そういうタイプの人物が将軍である時代であったから、求める能の種類も違っていき世阿弥や元雅を遠ざけていたのかもしれないとも考えられたところでした。

足利義満以降のこれまでの時代の観阿弥・世阿弥・元雅と続いてきた猿楽能の系統に越前猿楽をぶつけて戦わせていくことで能芸を時代により適したものへと進化させていこうとしていたのかもしれくません。そのためには、世阿弥たちよりも年盛りであった音阿弥の能の方がより適していたのでしょうか。

また、参考にした「福井県史」通史編2中世の第六章、中世後期の宗教と文化、第三節、民衆芸能、一、猿楽の中では「1466年には越前猿楽の女猿楽師が上洛して室町第や仙道御所で演能する」など越前猿楽の猿楽師がしばしば京都へ進出し、演能する機会を持ってきていたことも知られていました。

それが応仁の乱(1467年～1477年)以降の時期では京都の芸能市場は縮小を余儀なくされたために、金剛・金春・観世など大和猿楽座が越前や能登地方に行くことも増えていったそうでした。さらにこの時期から越前猿楽と大和猿楽の役者の交流も始まり、越前猿楽の役者が京都に住んだり、観世の役者が越前猿楽の芸養子になったりしていったそうでした。

応仁の乱の後で越前を平定した朝倉孝景も京都から猿楽4座をたびたび呼び寄せてきていたそうでしたが、やがて、地元で才能のある後継者を育成していくことの方が後の世のために重要であるといったことにも思い至られていたそうでした。

　こうした面からも分かるように、今日に繋がる世阿弥らの幽玄で優美さを追求した能舞の流派だけでない新たな能の流派も生まれてきていたのではないのかと思われたところでした。

(四、の参考文献・資料)

『看聞日記』、『満済准后日記』

4、『福井県史』通史編2　中世　第6章中世後期の宗教と文化　越前猿楽　若狭猿楽

福井県文書館デジタル歴史情報

<https://www.library-archives.pref.fukui.lg.jp/bunsho/category/digitalrekishi/147.html>

**(まとめにかえて)**

一では、世阿弥の『金島書』の「若州」「海路」を念頭にして佐渡の時期の世阿弥について考え調べて分かったことなどを反映させつつそのまとめを書いてきました。

二では、松岡心平氏の「世阿弥と満済」を読んでいきながら『満済准后日記』を手掛かりとしつつ世阿弥と義満、音阿弥と義教の関係や越前猿楽との関係などについて考えました。

三と四では、越前猿楽座の歴史的な展開についてまとめ世阿弥との接点や世阿弥が佐渡へ配流された『金島書』の頃の能の様子に関して越前猿楽座の京都での展開の様子を踏まえてまとめてあります。

以上が世阿弥の『金島書』の「若州」から「海路」のところの補論も含めた「佐渡の時期の世阿弥とその周辺」に関する報告書になります。